
桜の雨

草凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の雨

【Nコード】

N8467S

【作者名】

草凧

【あらすじ】

新一が蘭の目の前から消えて何日たったのだろうか？目の前に落ちてきた桜はいつたい何を言いたいのだろう。

あの時やっと会えた時にも舞っていた桜は自分に何かを言いたいのだろうか？

プロローグ

いつからだろう

空を見ると涙が出てくるのは

彼が居なくなつて、その表情も声も近くで感じる事ができなくなつてしまった

星が淡く輝くだけの真つ暗な夜空は自分の心のようで、切なくて涙がでてくる

「新一……」

返事があるわけじゃないのに、いつも呼んでしまふ大切な人の名前

あれから何日も何日も呼び続けていた

いつかあの声で返事が聞けると信じて

ひらり……

空を見上げていた視界に光るものがよぎっていった
去った先を見ると桜の花びらが机の上に落ちていた

「新一……」

もう一度彼の名前を呼ぶ

桜の花びらはもちろん答えてはくれない

でも・・・

「いつか会えるよね？」

プロローグ（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

支離滅裂になってないか不安ですが@@@;

誤字などありましたらご連絡ください。

後、感想もいただけるとうれしいです。

春休み

キーンコーンカーンコーン

「きりーっ、れーい。」

「先生さようなら、皆さんさようなら。」

退屈だった2学期の終わりを告げる挨拶を終え、江戸川コナンこと工藤新一は大きなあくびをした。

「ずいぶんと眠たそうね、工藤君。」

「何年も前に終わった授業を一からやってるんだぞ、退屈すぎて死にそうだ。」

「あら、私は楽しいわよ？担任の発言に正確性を見出しながら受ける授業は。」

「オメー趣味わりーぞ・・・」

帰る支度をしながら、灰原哀こと宮野志保の発言に呆れていた。

「コナン君！」

呼びかけに振り向くといつもメンバーが帰り支度を終えて自分達を待っていた。

「帰りましょう。」

少年探偵団のメンバーの一人円谷光彦が帰りを促す。

「わりー、俺ちよつと寄る所があつてな。」

「えー、どこ行くの？」

同じくメンバーの一人吉田歩美が不満そうな顔をした。

「探偵左文字の新刊を取りに行くんだよ。」

「だったら一緒にいってそのまま遊べるだろ、博士の家に行つてよーそのままおやつもらおうぜ！」

「オメーはそれ目当てだろうが・・・」

いつも食べることしか考えてないかのような自称少年探偵団団長小島元太にも呆れながらも帰り支度を進めるコナン。

「だめよ、この探偵さんは。どうせ小説を買ったらそのまま読破するため一日を無駄にする気なんでしょうから。」

「でも明日から春休みですよ？読むのは明日でもいいじゃないですか。」

「お前暗いところにいたら大きくなれねーぞ！子供は外で元気に遊ばないと大きくなれねーって母ちゃんいつてたぞ！」

「ほっとけ・・・」

(今は縮んでんだよっ！)

「とにかく、俺は今日はそういうことだから、誘ってくれるんなら明日以降にしてくれよ！じゃあな！」

そういつてコナンは教室をかけて出て行った。

「行っちゃった。」

「どうします？コナン君がいないとサッカーは難しいですし。」

「博士の家に行く？新しいゲームもできてたみたいだし。小島君の言っただようにおやつくらいなら出してくれるかもよ？」

「本当か？やリー！」

「じゃ、荷物置いたら博士の家に集合ね！」

そういつて走っていった三人を見て灰原はクスツとわらった。

「可愛いわね。」

そうして、灰原も自宅の博士の家に足を進めた。

春休み（後書き）

冒頭の挨拶は実際に私が小学生のときにしていた帰りの挨拶ですw

この話は次に続く話の前振りとして呼んでいただけで嬉しいです。
探偵左文字を楽しみにしているコナンを出しておきたくってw

それでは、感想お願いします！

探偵の楽しみ

灰原達と別れてコナンは行きつけの書店へ向かっていた。

今日は待ちに待った『探偵左文字シリーズ』の最新刊の発売日。

しかもただの発売日ではないのだ。

新著者、新名香保里が左文字シリーズを手がけるようになってから10巻目。

それを記念して、書店でサイン会が開かれるのだ。

「く〜！たまんねーぜ！待望の最新刊に原作者のサイン入り！父さんが日本に居たころはこねでもらえてたけど、本拠地を海外にしているからそれもなくったからなー。」

因みに、コナンが喜んでいるのは『原作者のサインが入った新刊』であって、とある男性のように『新刊にサインを入れる原作者』ではない。

今回のサイン会は、新刊を予約した人先着50名までを招待すると言うことを1ヶ月前に発表されていたのだが、実はコナンはつい最近まで知らなかったのだ。

それを知ったのは、1週間前に新刊が発売されることを知ったとき、店長に言われて初めて知ったのだ。

左文字ファンだということを知っていた店長が1人分除整理券をよけておいてくれたのだ。

あまりの嬉しさに顔がにやけているコナン。これが新一の姿でしていたらきつと不審がられて居ただろう。

「おっと・・・」
慌てて平静を装うが、如何せん、やはりにやけてしまう。

何度か表情を改めていると、書店が見えてきた。

「おー、コナン君きたか！」

「こんにちは、店長さん！」

サイン会場の周りの整理をしていた店長がコナンに気付き声をかける。

「あと30分で始まるから。ほかの人がいっぱい並ぶ前に列に着いたほうがいいぞ」

「はい！」

素直に列に並ぶコナン。見ればすでに20人ほど既にならんでいた。整理券を貰っているといっても、並びの順番までは決まっていない。前もって蘭に遅くなることを伝えていたとしても、遅くなりすぎるとお小言は免れない。列に並ぶために移動している間にも、4人ほど増えて最終的にコナンは24番目となった。

時間になり、編集者が新名香保里を紹介し本人も挨拶をしサイン会は開始された。

30分ほどでコナンの番になり、久々に香保里と対面した。

「あら！コナン君じゃない！コナン君も読んでくれるの？」

「お久しぶり！香保里さん！10冊目おめでとう！」

「ありがとう。自分ではそんな実感ないんだけど。」

嬉しそうに笑う香保里にコナンも笑顔を返す。

「でも、コナン君みたいな小さい子でも読んでくれるなんて、すごく嬉しいわ。」

「うん！僕香保里さんのお父さんの時から左文字シリーズ大好きなんだ！」

「そう。父もきつと喜んでるわ。あ、そうだ！」

突然何かを思い出したように、側においてあったかばんをあさる香保里。

そして出してきたのはひとつの封筒。

「これ、父が書いた最後の小説なの。」

「え！最後の！？」

「ええ、本当はこれを遺作として出版してもらいたかったんだけど・・・」

「だめなの？」

遺族がそれを願うなら、出版社側からすればすぐにでも出版したがるだろうに何を悩んでいるのだろうか？

「それが、この小説途中までなの。」

「途中！？」

「そうなの、推理も解決して後は犯人を特定して推理を披露するだけなんだけど。犯人がぜんぜんわからないの。」

「！？」

「この小説、推理の大半をカットしてるみたいで、要所要所しかわからないの。それこそ警察に人伝で説明されたような感じで、証拠物件はあるけど、それをどう組み立てるかとかぜんぜんヒントがわからなくて。」

「へー・・・」

あの左文字の著者がそのように小説を作ることにはなかつたのだが、あのと時のようにまた読者に挑戦する形で小説を作っていたとは。

スツ、と出された封筒。

「え？」

差し出された意味がわからず首をひねるコナン。

まさか、小五郎に解読を頼もうというのだろうか。

「コナン君、読んでみる？」

「いいの？」

「ええ。なんだかコナン君なら解読できそうなきがするわ。いつか会ったら渡そうと思って。わかつたら教えてくれる？」

「うん！」

願ってもない申し出に断る理由もなく受け取るコナン。

「香保里さん、そろそろ次の人にいかないと！あとつまってますよ！」

「あ、そうね！ごめんなさい。それじゃ、コナン君。また今度ね！」

そのときには私の方の小説の感想も教えてくれると嬉しいわ。」

「わかつた！ありがとう、香保里さん！」

そういってコナンは会場を後にした。

手には、サイン入りの最新刊と新名任太郎の残した最後の小説。しかも解決していないとなると嬉しさも倍増だ。

「一生分の運を使い果たした気分だぜ！こりゃ等分ねねーなww」

帰路につくコナンのにやけ度は行くときより200%倍増していたのはここだけの話。

探偵の楽しみ（後書き）

どんでかき書店なんだろうw w

コナンの楽しみと言えばやはり読書しかないなど。

原作の中でも左文字シリーズが大好きということなんで、香保里さんに登場していただきましたw

それでは、ご意見ご感想お待ちしております。

訪問者

「花見〜!?!」

明日から春休み、佐門字の最新刊。コナンはいつもよりも嬉しさ倍増で事務所のドアを開けたが、とある色黒青年に掛けられた言葉に笑顔から半目状態に豹変し、冒頭のセリフを吐いたのだ。

「そや。明日から春休みやろ？知り合いの別荘地に桜並木があつてな、なんや、その別荘の掃除したら夕ダで貸してくるゆうてな。ついでやし坊主ら誘つて花見でもしたらエエ思つてな。」
コナンの表情に気付いたのか、気付いてないのか、ここにきた目的を笑顔で伝える服部平次。

コナンが戻つて来た瞬間の服部の開口一番が

『泊まりがけで花見行くで
だったのだ。』

「で？わざわざそれを言う為だけに大阪からきたのかよ。」
今までの事から、断つたとしても結局は流されてしまうので、あえてそれをしなかった。

「アホ、んなことあるかいな。」

「・・・」
ジト目で睨みを利かせ見上げてくるコナンに、平次は恐怖を感じ半歩下がってしまった。

「怒んなや、ほんまにちゃんとした理由があんねん。」

「なんだよ。」

「さっき言った別荘がな、こっから車で1時間程度の所やねん。で、

誘う相手に無駄な出費させへん様にこつから車ですぐ出れるように、俺らがこつちに着とこつゆう話になつたんや。」

「だとしてもだ、今日いきなり来て花見するなんて言われても、こつちにも都合つてもんがあるんだよ！何でお前はいつもいつも行動が突然なんだよ。」

盛大なため息を吐き、呆れた顔で平次を見上げるコナンに、平次は不貞腐れたような表情でコナンの向かいのソファーに腰をかけた。

「今回は俺の所為ぢやうわ。桜の見ごろが明日やゆーて急かしたんは和葉や。でも、毛利の姉ちゃんに話つけたゆーてたで？昨日。お前聞いてへんのか？」

肩を竦め、少し離れた場所で談笑している和葉と蘭を見ながら平次はため息を吐きながら、今回のこの急遽決定した『花見』の真相を話した。

「いや、昨日は俺、自分の家で読みたい本があったから。博士の家に泊つてる事にして自分家で寝たんだ。」

「にしても、珍しいな。毛利の姉ちゃんが連絡忘れるって。……何かあつたんか？」

自分との話の途中に、小説を読み始めたコナンの本をムツとしながら取り上げた。

「あつ！……チツ。別に、なんもねーよ。昨日の夜に蘭から電話有ったけど、普通に会話しただけだぜ？そんな時に今日のこと言つてなかつたしな。」

「ふーん。ま、ええわ。とりあえず出発は明日の朝9時。車は例のごとくおつちゃんがレンタルしてくるゆーてたから。今、手続きしに行つとるし。」

「へーへー。」

「お前、行く気あるんか？」

「ないって言ったら遠慮してくれんのかよ？」

「ないな。」

「ハア……。」

本日何度目かの盛大なため息に平次の眉がピクリと動くが、あえて何も言ってはこなかった。

「どうしたの？コナン君。ため息なんかついちゃって？」

「蘭姉ちゃん。別に何でもないよ！」

子供用スマイルを顔全体で表現したコナンに、蘭も大して気にしなかった。

「そう？」

「あ、蘭姉ちゃん。お花見に行くって平次兄ちゃんに聞いたんだけど。昨日から知ってたって本当？」

「あー！ゴメンね〜コナン君。昨日電話した時に言えばよかったんだけど。忘れちゃってたみたい。本当にゴメンネ？」

両手を合わせて、本当に申し訳なさそうに誤る蘭に非難なんて出来る訳もなく……

「ううん！別に大丈夫だよ！僕お花見大好きだから！」

「よかった〜。今から明日の準備するから。コナン君も必要な物を出しておいてね？後でカバンに詰めましょ？」

「うん！」

そう言っただけで蘭は和葉に一声掻け、自宅である3階に上がっていった。

「ほんま、役者やのー工藤。」

「うっせ。」

ニヤニヤしながら見つめてくる平時に一瞥しながら、奪われていた本を取り返し3階へと上がって行った。和葉は準備をする蘭の代わりに夕飯の準備をする為に、キッチンへと行っていた。

一人残された平次は、窓の外を見ながらポツリ、と呟いた。

「姉ちゃんが忘れてしもた理由・・・もしかしたら工藤。お前に有るかも知れへんな。」

訪問者（後書き）

知っている人は知っているww
そうです、前のIDで書いていたときのを引っ張ってきました（手
抜きなんていわない！（笑））

平次「ようもワシらを2年以上もほっておいてくれたのう？」

草風「ドキッ！！（——；）」

コナン「ソーソー」

草「（＝；） ギクッ」

平「何で今までかかんかってん！」

草「だって・・・だって・・・」

コ「（続きがとても楽しみです！）ってオメーにはもつたいないコ
メントもらっておいて！」

草「ひーーーー><」

平「言い訳くらいなら聞いてやらんでもないで〜？（笑）」

草「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ねたがなかったんだ
！ーーーー！！

（。コッソリ・・・」

コ平「開き直んなーーーー！！」

ということなんです（笑

かといってねたが増えたかといえはそうじゃないん・・・オラア（

p.p.□。○（＝p）、）グハッ

こっ、今度は2年もあけないからー！

感想おねがいします！！！！><

夕飯

その晩は、例のごとく大阪の二人組は毛利探偵事務所に泊まることとなり、和葉中心に作られた夕食は、所狭しとテーブルを埋めていた。

「ぎょーさん作ったもんやなー？」

「しゃーないやん。育ち盛りに食べ盛りがおんねんで？これぐらいはいるやろ？」

「育ち盛りはまー・・・分からんでもないが、食べ盛りってお前のことか？そないに食ったら縦やのーて横に成長してまうんやないか？」

チラリとコナンを一瞥し、和葉のとある部分を凝視した。

「あゝのゝなゝ！なんで私やねん！！あんたやあんた！！」

「は？何で俺やねん。確かにまだ成長期やけど、こないに食うほど大食いやないで？」

さも心外だと言う平次に和葉も今日一番であろう盛大なため息を吐く。

「ハア・・・誰が成長期やねん！この前食べたりんゆうて人のおかずの半分を勝手に食べたんはどこ誰やねん！ただの大食いやんか！」

「しゃ、しゃーないやんけ。試合前の練習で扱かれて、めっちゃ腹減ってたんやし・・・」

反論するものの、その声は小さくて、まるで子供が拗ねているようだった。

「ごめんね、服部君。昨日のうちに2・3日分の食材買っちゃって

て。3日間居ないとなると、置いとく訳にもいかなくて。」

「あ、や・・・別に、姉ーちゃん責めとんのとちゃうで?」

「そつやで? 蘭ちゃん。悪いのは余計なこと言う平次が悪いねんで!」

終わりを見せたかと思われていた夫婦漫才が再開され、いつもとは違う賑やかさの中、コナンは黙々と食事を勧めるだけだった。

「そついや蘭、お前達何日あっちにいるんだ?」

新聞を読みながらビールを飲んでいた小五郎がふと気が付いたかのように聞いてきた。

「明日から3日間よ! さつきも言ったじゃない! もー、お父さんはすぐ忘れるんだから!」

呆れた様に視線を向けられ、小五郎は

「そ、そつだっけか? はは・・・あははは。」

と、誤魔化すしかできなかった。

「あ、あのさ、蘭姉ちゃん。僕も聞いてないんだけど・・・3日間つて。」

「え、うそ!? 言ってなかったっけ?・・・あー、きつとお花見のことも言ってなかったからだわ。わー、本当にごめん!! 完璧に忘れてたみたい!」

「あ、や、べつ別に大した事じゃないから、大丈夫だよ! 蘭姉ちゃん。」

両手を合わせて謝罪する蘭に、気にしてないといい、コナンは食事を再開した。

その横で平次がじっと見つめていることなど気付かないで。

夕飯（後書き）

いえーい！2話連続投稿だー！（威張んな！

はい、今回もコピーです@ @；

次からは新たに投稿なので、更新は遅くなるかもですが<<
がんばりますので感想おねがいします!!

小さな疑問

時刻は朝の7時。

いつも通りの躰と、新しい躰に邪魔されてしまい、取りたかった睡眠もろくにとれずコナンは目を覚ました。

「ったくよく、おっちゃんだけならまだしもこいつまでこんなだとは……」

ぶつくさ文句を言いながらも、起きてしまったならばついでの起きてしまおうと布団から体をだした。

「あら、コナン君。早いよね。」

「蘭姉ちゃんも起きてたんだね。」

リビングに行くところには既におきて支度を済ませていた蘭が最後の準備をしていた。

「なんだか目がさめちゃって。準備済ましちゃうとおうと思って。」

「もう、終わったの？」

「うん、あとこれを入れたら終わるわ。コナン君も起きたんならパジャマ洗濯しちゃうから、着替えちゃって。」

「はい」

そういつて、コナンは着替えるために寝室へと戻っていった。

ーが、

（蘭のやつ、目の下にクマができてた。今日もあんまり寝れなかったのか？）

食事の後、順番に風呂に入り蘭と和葉は蘭の準備のために2人で蘭の部屋へいき、コナンと平次は特にすることもないので早々に就寝したのだ。

その後、蘭に何があつたのか、直接本人に聞いてもはぐらかすだけ。
「後で和葉ちゃんにでも聞いてみるか。」

「何を聞くんや？」

「!？」

いきなりの声に一瞬驚いたが、この独特のイントネーションの持ち主は一人しか居ないのに気付いた。

「なんだ、服部か。」

「何だはないやろ。昨日の今日で俺の存在忘れんなや！」

「忘れていいなら忘れたいがな。」

「工藤、お前最近性格悪いで……で、和葉に何聞くんや？」

「んあ？あーちよつとな。」

そいつってコナンは（ニイ）と意味ありな笑顔を服部に向けた。

「工藤！」

真顔でコナンに詰め寄る服部に、コナンはたまらず噴出してしまった。

「あーはっはっ！オメーおもしろー！」

「……やっぱりお前性格悪くなってんで……」

ジト目で睨む服部に笑いを抑えることができず、

「わりーわりーw冗談だよ。ちよつと蘭の様子が気になってな。」

まだ笑いが収まらないコナンは服部に説明した。

からかわれた服部は笑われたことに腹を立てながらも、コナンが正直に説明したことに文句に行くことはなかった。

「様子って、何かあつたんか？」

「いや、特にどうこうってことはないんだけど。あいつあんまり寝れてねーみてーなんだ。」

「昨日今日の話やないみたいやな？」

「ああ、様子がおかしいって思ったのは1週間前くらいからだな。」

あの京都から帰ってきた日くらからだな。」

服部に説明しながらも、身支度を整えるコナンを見ながら服部は顎に手を当てて何かを考えてるようだ。

「どうした？服部。」

「姉ちゃんの様子がおかしいの、ほんまに京都から帰ってからなんか？」

「そうだけど、それがどうかしたのか？」

「コナン君？着替えた？そろそろ洗濯したいんだけど。」

服部が何かを言いかけたとき、蘭が部屋を開け顔をのぞかせたので、服部は言うタイミングを逃した。「あ！うん！もうすぐ終わるから！」

「そう？じゃあ、和葉ちゃんも服部君も起きてるみたいだから朝ごはんつくるわ。洗濯物かごにいれといてくれる？」

「わかったー。」

そう言って蘭は部屋から出て行った。

「もうそんな時間か。俺も着替えるか。」

「ん？ああ。」

服部が言いかけそうになったことが気になったが、何も言い出さないコナンは疑問を残しながらも服部の居る部屋を後にした。

小さな疑問（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

さーって、いったい何が原因なんでしょうかね？w

平次は何かに感じているみたいですしw

あと2・3話で完了する予定ではありますが、如何せん文才のない
管理人なもので、まとめることができず、ずりずりと。。。。
長い目で見えてやってください@@；

感想よろしくお願いします！

いわゆる・・・

大型連休初日には思ったより車の量が少なく、予定より1時間早く目的地に着いた。

同じ東京都内なのに、緑が多く別荘地でありながら緑化公園でもあるこの敷地の中ほどに目的の別荘はあった。

「おい、とりあえず管理人とこにいけばいいのか？」

「せや、別荘の鍵と使用登録せなあかんらしいから。とりあえず先にそこにいかんと。」

そういって、平次の指差した方向にはログハウス調の管理人の家があった。

「へー、かわいいやん！」

「うん！おとぎ話に出てきそうね！」

蘭と和葉は目を輝かせて管理人の家を眺めていた。

「おや、いらっしやい。」

振り返ると、人のよさそうな男性が、立っていた。

「あ、管理人のおじさん？」

「そうだよ。君たちはどなたかな？」

「お、そやそや。今日から2泊3日で狭山さんの別荘を借りることになったよ、服部や。」

「服部さんね。ちょっと待っていてくれるかな。」

そう言っつて、管理人はログハウスへ戻り、程なくして戻ってきた。

「えーっと、代表者が服部平次さんでお連れさんが遠山和葉さんと毛利蘭さんと江戸川コナンさんの4人でよかつたかな？」

「はい。」

「じゃー、申し訳ないけど一応この利用規約を確認してもらって問題なければ最後にサインしてもらっていいかな？」

一通り黙読し、特にないとつぶやきながら服部平次とサインをした。

「ありがとう。はい、これが別荘の鍵ね。一つしかないから無くさないように。後掃除のことだけど狭山さんから連絡をもらってて、昨日掃除を軽くしておいたから。後は食器関係と布団をすればいいだけだから」

「え！？せやかて掃除を条件に貸してもらーたんとちゃうん？平次？」

今回の別荘を貸してもらう条件が確か掃除をすることだったはずと平次と和葉は顔を見合わせた。

「お、俺かてそう聞いてたわ！」

「はははは！そうそう、最初はそういう約束だったらしいね。でもその時に他に誰かいなかったかな？」

「他につて・・・おとんとおかんがおったくらいやで？」

「まだわからないかい？」

顎に手を当てて考え込む平次。そこにコナンの声が、

「建て前だね！」

「お、坊やよくわかったね！」

「建て前って、なんでや？」

(こいつ、本気でわかってねーな・・・)

「だってそうでしょ？僕たちお掃除しなかったらタダで別荘を3日も借りれるんだよ？」

子供っぽく話すコナンに管理人は笑顔でうなづく。

「そうそう、君のお父さんと狭山さんは友人同士だからこういうことが起こってもおかしくはないが、君と狭山さんとは何のつながりもない。きつと狭山さんは君のお父さんの手前、そうだったんじゃない」

ないかな？楽しんで得をしようなんて君のお父さんなら許してくれなさそうだしね。」

「あーなるほどな。でもほんまええんか？」

「狭山さんがいって言うてるんだから、気にすることはないよ。3日間いっぱいたのしんどいで。」

そう言うと管理人は管理人用の建物へ入っていった。

「確かに、おとんが知ったら後が煩そうやな・・・」

そのシーンを想像したのだろうか、平次は引きつった笑みを浮かべ、和葉や蘭も苦笑していた。

「と、とりあえず鍵も手続きも済んだことやし、そろそろ別荘行つてすることさっさとすませてまお！」

言うが早いか、平次はさっさと別荘へ向かって歩き出した。

いわゆる・・・(後書き)

ん〜(@@:)

やっぱり平次をだすとシリアスにしようにもギャグになりそう・・・

(笑)

補足をさせていただきますと、狭山さんと平次のお父さんは旧友の仲でそのことは管理人も知っていること。ただ、息子である平次のことには知らないので最初にわからなかったということです。

服部って結構こっちじゃ聞く名前なんでw

次話はシリアスでメインのストーリーになるはず！

ご意見感想よろしくお願いします!!

見落としていた

管理人室からさほど離れていない場所に目的の別荘はあった。

「うわゝ、可愛いゝ！」

「ほんまやわゝ！小人の家みたいやわ！」

目の前に現れた狭山氏の別荘は、一本の大きな木で作られたかのような外観で、偶然なのか必然なのか、その屋根には別荘を囲む様に植えられた桜の木が覆い隠すように被さっていた。

「うん！まるで私たちが小人になったみたい！」

「なーw何や、草むらの中に隠れ住んどるみたいやわw」

さすが女の子なだけあって考えることはメルヘンだ。

それに対して男の子は、

「ほー、えらいごっつい作ったな！」

「ああ、流石にマジで一本からってことはないだろうかな。いったい何百本の木を使ったんだろうな！」

「そこ！何夢の無いことゆーてんねん！」

「ええやないかい！現実的なことに疑問持っただけやないかい！」

ギャーギャーといつもの漫才を始めた二人に、またかという視線を送る。

ただ、その後ろで一筋の涙を流しながら桜を見上げている蘭を、誰も気付いてはいなかった。

本当の

何時までも漫才を続けておくわけにもいかず、とりあえず別荘へと入った4人

「へへ内側も丸みがあるんだね。」

一本の大木からできた様な外観に合わせ、内観もそれに合わせて丸みを帯びた造りになっていた。

「ステキ〜w」

「家具もキッチンも全部木製やん。何か落ち着くわ〜w」

「いい趣味してんやん。狭山のおっちゃん。」

「ゆっくりするにはいい感じの別荘だね。」

四者四様の感想も、総合すれば結局は

「……いいとこに来たねw」「」「」

という事らしい。

「とりあえず、キッチンと布団をしましょう。」

「ほんなら、うちと蘭ちゃんはキッチンやね。平次とコナン君は布団干してきてーな。」

「うんー！」

「ほんなら行ってくるか。」

布団を干すといっても、4人分の必要な布団を干すだけなので、30分もあれば終わってしまった。

「ほんま、埃も落ちてへんし、至れり尽くせりやね。」

「ああ、何か申し訳ないな。」

「まー、好意うちゅーことで有難く受け取ったらええやろ。」

「そうだな。」

「とりあえず、終わったんやし、降りるとするか。」

1階に下りると、こちらも一通りの事は終わったらしく、テーブルでお茶をしていた。

「あ、平次。上は終わったん？」

「おお。ま、干すだけやったし、布団以外は本当に綺麗にしてもろーてたで。」

「お疲れ様、服部君コナン君。お茶にする？」

「おおきに、姉ちゃん。よばれるわ。」

「ありがとう、蘭姉ちゃん。」

はい、と渡されたコップを受け取り、一口飲む。

「うまいな、姉ちゃんこれどのメーカー？」

「これ、私がブレンドしてみたの！口に合ってよかったわw」

「へー、これ姉ちゃんが作ったんか？いいセンスしてんな。」

「うんwおいしいよ蘭ねえちゃん！」

「和葉もこれくらいのこと出来る様にならんと、嫁のもらいてなくなんぞ？」

「あんたに言われとうないわ！あんたこそその嫌味な性格直さんと嫁さんこんくなんぞ！！」

(何時まで続くんだ、この漫才・・・)

いい加減聞き飽きた漫才にうんざりするコナン。それよりも、

「蘭姉ちゃん、僕お腹すいちゃった。」

「そうね、まだ早いけどお昼にしちゃいましょうか。」

「うんw」

「はいそこ！何時までも喧嘩しないの！」

「すみません」

(何やってんだか)

蘭の一括で喧嘩が收拾され、蘭と和葉はキッチンへ、コナンと平次はベランダへと向かった。

「それにしてもすげー桜の木だらけだな。」

「ああ、何でも狭山さんの娘さんが桜ちゃんゆーてな、それに困んで桜の木を植えたらしいんやけど。流石に多いな。(笑)」

その後二人とも無言になり、ただ桜を眺めていた。

ふと、平次がコナンを見やる。

何か悲しげに、そして愛しそうに桜をみるコナン。

そのコナンをずっと見ていると、ふとこちらを振り向く。

「何だよ服部。俺の顔に何か付いてるか？」

「いや、別に付いてへんで？」

「んじゃ、何だよ。さっきから人の顔ジーンと見やがって。」

「・・・なあ。」

「あんだよ。」

「あれから、姉ちゃんには電話したことあるんか？」

「はあ？電話も何も、目の前にいるんだから必要ねーだろ？」

「アホ、コナンのーて『工藤』としてや。」

流石に、目の前に蘭がいるのは分かっていたので、『工藤』の部分

は耳元で囁く。

「ああ、その日に掛けるのも思ってたから、2日後に電話したけど、それがとーしたってんだよ。」

「一応、会ったんやろ？姉ちゃんと。その事何て言ったんや？」

「別に。いつものように蘭が寝ちまつてる間にずっと追いかける事件に進展があつたから行かなくちゃならなくなつたからって。」

「それだけか？」

「それだけ。」

「んで？姉ちゃんはそれで納得したんか？」

「・・・分からねえ。」

「何か言ってきたんか？」

「《本当に新一だったんだよね》だつてき。俺じゃなかつたらなんだつてーんだよ。」

「・・・ハア」

「何だよ。」

「工藤、お前本当に分かつてないんやな」

「何だよ。お前は分かつてるって言うのかよ。」

「あのな、姉ちゃんは「ご飯できたよ」」

身を乗り出してコナンに説教をしようとした平次の勢いも、蘭の一声で行き場を無くし、前のめりにこけてしまった。

「服部君どうしたの？」

「あ、や、何でもあらへん。つま先にテーブルが引つかかってもーてん。」

「そう？ご飯できたから、二人とも手を洗ってきてね。」

「はい」

笑顔で言われたとおりに手を洗いに行くコナンを恨めしそうに見ていたが、何か遣る瀬無い思いもこみ上げてきた平次。

「ほんま、自分の事に関しては無頓着やな。姉ちゃん、泣かすんも

やけど。」

ヒラリ

一枚の桜の花びらが、さっきまでコナンが座っていたいすの上へ落ちてきた。

「笑顔にさすんも、工藤。お前だけやねんで？」

本当の(後書き)

いや〜何とか更新できましたw

やっと確信に触れる会話が発生してなによりです(笑)

あと1話かもしくは2話で完結する予定です。

ご意見感想お待ちしております。

木漏れ日の中で

蘭と和葉のお手製の昼食を平らげ、食後のコーヒーを飲んでいる時にふと平次が思いだしたように、

「そういや、ここレンタルサイクルあるゆーてたで。後でいつてみるか？」

「ほんま？行く行くー！なー、蘭ちゃんも行くやろ？」

「えっ？あ、うん！行こうか。あー、服部君、そこ、子供用ってあるのかな？」

コナンをちらりと見やる蘭。

平次も同じようにコナンを見て、これ見よがしに

「心配せんでええでwちゃんとサーチ済みや！《お子様用》もちやんとあるでーw」

「よかったね！コナン君！」

と、本心で喜んでくれる蘭。

「うん！」

そんな彼女には笑顔で答え、その笑顔のまま平次の方へ振り返る。

「ありがとう！平次兄ちゃん！」

今度は笑顔の仮面に変えて。

「お、おう。（や、やり過ぎた？）」

（つつたく、ぜってー元に戻ったら仕返ししてやる！）

眩しい日差しも、桜並木を走る四人には丁度いい明るさをもたらしていた。

「たまにはチャリ乗るんもええな。」

んーと背伸びをする平次に、和葉は呆れ顔だ。

「ほんま、ちよつと近所に行くだけでもバイク走らせるんやから。運動不足になつてもしらんでー。」

「あほう！あれだけ部活で扱かれて、どないしたら運動不足になるゆーんや！」

「よーゆーわ！事件や、サボリやゆーて、真面に部活出るの一週間に1・2回やないの！」

「せ、せやからその2回の部活で一週間分扱かれんねん！近所に出かけるのにバイクつこーてもかまへんやんか！」

終わらない夫婦喧嘩。

いい加減止めないと思いなながらも、その間に入る事も躊躇われる訳で、

「はあ……」

ただため息を吐くだけだった。

「蘭ちゃん！」

「はい！」

突然呼ばれた蘭は勢いのあまり直立してしまった。

「蘭ちゃんのところはどないやの？」

「え？私のとこって？」

「せやから、工藤君のことや！工藤君は蘭ちゃんの言うこと素直に聞くん？平次みたいに口答えするん？！」

「ずいずい詰め寄る和葉に、蘭も思わず後ずさりしてしまう。」

「あ、余り変わらないと思います！」

思わず敬語になってしまった蘭に気付かず、さらに和葉は詰め寄る。

「ほんなら、どうやって言うこと聞かせてたん？蘭ちゃん、工藤君とあんま喧嘩したことないって園子ちゃんがゆーとつたで！平次、ちつともゆう事聞いてくれへんねん！」

和葉の後ろで、（お前は俺のおかんか！）と叫ぶ平次を無視する。

「まー、確かに本気で喧嘩した事はそんなになかったかな？でも、さっきの和葉ちゃんと服部君の喧嘩みたいなのはしょつ中だし。新

「も頑固者だったから。」

「（頑固者ってなんだよ。）」「ボソツと言ったコナン。」

蘭達は少し離れたベンチにいるため、コナンの呟きは聞こえなかった。

代わりに隣にいた平次には十分聞こえていた。

「ほー、頑固者やって（笑）確かにお前は頑固者やなw」

「うっせ。お前と一緒にすんな。俺はまだ聞き分けはよかったよ！」

「ほんならどーやってやってきたん？」

「うーん、あんまりそういうの、きにしたことなかったから、どうって覚えてないんだけど。なんて言うのかな？新一が私の事をわかってくれてたから…かな。」

少し照れたように俯く蘭。

聞いていた和葉はとても嬉しそうに瞳をかがやかせた。

「うわーwさすが工藤君やわー！蘭ちゃんの彼氏だけはあるわー！」

「か、彼氏じゃないよ！ただの幼馴染だから！」

「照れんでもええねんでw」

「あ！ほら和葉ちゃん！そろそろ自転車返さないといけない時間だよー！」

返却時間まで後30分。確かにそろそろだが、ここから数分で目的地。さほど急ぐ必要もないのだが。

「せやね。そろそろいこうか！」

あのまま、蘭をからかい続けてもよかったのだが、流石に可哀そうと思い、蘭の提案にのった。

「ほら、服部君、コナン君行くよー！」

「はいー！」

いいお返事をするコナンを、服部は

「ほんま、猫かぶりがお上手なこと。」

「お前もたまにはかぶってみれば？けっこつはあったけーぜ？」

「さよけ（笑）」

先に走り出した蘭達を追いかけるように二人も走り出した。

罪人

別荘に戻った頃には程よく夕暮れになり、青から赤へのグラデーシヨンが空を覆っていた。

「家にいたらこんな綺麗な空、こんな広いパノラマでみれなかったね。」

「せやね！こんなに邪魔な景色がない空なんて、街中やったら絶対みれへんもん！」

「きつと今晚は綺麗な星空が見れるね！」

女性陣が、景色を堪能している間、男性陣はやはり育ち盛りなのか、既に空腹状態。

「そんな事より、はよ飯の準備せーへんか？腹ペコペコや。」

「ムードぶち壊しありがとぉ！全く、工藤君なら気ー効かせて遠慮してくれるやろうに！ほんま！あんた少し工藤君の爪の垢でも飲ませたいわ！」

（あきないねーこの二人）

本日何度目かの夫婦喧嘩の目撃者になってしまったコナンは、既に止める事を辞めている。

それよりも気になるのはと、バルコニーを見れば、蘭が夜空を、いや、正確に言うと桜を見上げていた。

（蘭…）

悲しそうに切なそうに愛おしそうに、見上げている。

そんな表情をさせているのは、自惚れかもしれない。

でも、きつと

(俺の、せいだ。)

コナンも、薄々は気付いていた。

だが、確信もなかったし今回のような事は一度や二度ではない。今更と言う思いもコナンの中にあっただのも事実で。

だから、蘭の様子がおかしかったのは別にあるのではないかとおもい、親友の和葉なら知っているかもと、今回の旅行で聞いてみようと思っていた。のだが…

蘭がこんな表情をするのは、間違いなく『工藤新一』に出会ってしまっただけ。

あの京都の事件の後、電話を掛けるのを控えていた。

かければきつとあの時の事を聞かれるだろう。

あの時蘭も一時の間でも自分に会えた事を喜んでくれた。

だから自分もそれで満足してしまった。

蘭の本当の気持ちに気付きもしないで。

出会ってすぐに別れる。

そんな繰り返しに、時に悲しみを溢していた蘭。

いつも励ましていたのは自分だ。

でもきつと蘭が欲しい言葉は今の自分からの言葉ではない。

そう

『工藤新一』

たった一人から、たった一言

あの言葉が発せられるのを、待っているだろう。

今のままでは何も伝えられないのだ。

蘭から、真実から、始めてコナンは目をそらしたのだ。

叶うことなら

言いたいこと、聞きたい事。

いっぱいあるのに。

いつも聞けないでいた。

電話番号は知ってる。

でも聞けない。

聞いてもきつと同じ答え。

本当は会ってきちんと聞きたい。

どうして、一緒に居られないのか。

どうして、一人なのか。

どうして、

何も、言ってくれないのか。

やっかいな事件なのは分かってる。

周りの皆を巻き込みたくないのも、知ってる。

だけど、私はそんなの嫌なの。

知らない所で危険な目にあってるなんて。

私だって、何かできるはずなのに、何もさせてもらえない。

命に関わる事かもしれない。

ううん、だからこそそばにいたい。

ただ、そばに居られるだけでもいい。

近くですつと貴方を感じていたい。

お願いだから、私が貴方を忘れてしまつ前に、どうかその温もりを
思い出させて。

悲しみは強さに

あれからどうやって過ごしてきたのか、覚えていない。

何となく和葉と話をしていた。

何となく食事をしていた。

何となく・・・

気がつけば夜中の12時を回ろうかとしていた時、蘭は未だ寝付けずベランダからまた桜を見上げていた。

あれから、桜をみると必ず思ってしまうあの京都での出来事。

今までにも何度か同じような事はあった。出会えてもつかの間。

すぐにいなくなってしまう彼。

だけど蘭の心も限界だった。

会いたくても会えない、会えても直ぐにいなくなってしまう。

新一にももちろん考えがあって全てを伝えてはくれないのだろう。

今までの彼の性格を考えれば、理由は一つ。

自分だ。

事件に巻き込まれているのは間違いないのだ。

ならば何も言ってくれないのは、それを知ってしまった自分が危険に巻き込まれてしまう可能性が十分ありうるからだ。

そんなことをあの日からずっと考えていた。
眠れない日も続いている。

もちろん電話できるのだから、聞いてしまえば話は早い。でもきつ
といつものようにはぐらかされて終わってしまう。
強く聞いて彼を困らせることもしたくは無い。

堂々巡りの自問自答は蘭の精神を少しづつ病んでいく原因になっ
てしまっていた。

それは親友の園子にもはっきりと分かるくらいにだ。

夜になってもまだ暖かさが残るこの時間、蘭はカーディガンをはお
り音を立てないように別荘からでた。

ここに来るとわかった時に気付いていた。

実は、ここには工藤勇作の別荘、そう、新一の別荘でもあるのだ。
その建物がこの近くにあるのだ。

会えるわけでもない、何かあるわけでもない。

ただそこに行けば自分が何かを納得できるものがあるかもしれない。
そう思ったから、自分から行動しないといけない気がしたから。

蘭は迷うことなく向かっていったのだ。

夢でも現でも

今回泊まる別荘から然程遠くない場所に工藤家の別荘はあった。

大きすぎず、でも不便に思うほどの小ささでもなくちょうどよい大きさの別荘。

家族水入らずを重んじた勇作の趣味が伺える。

この別荘にも桜の木が1本植えられている。

ここに何か植えたいと有希子に言われたときに蘭が桜と答えたからだ。

あれから何回もここへ訪れたときには必ず満開の桜を咲かせていた。

「今年も、綺麗に咲いてくれたんだね。」

桜の隣にあるベンチに腰掛ける。

記憶にあったこの風景。

間違いなく現実のものだった。

確かめたかったのだ。

《工藤新一》を

会えてたときが今では夢ではなかったのかと、本当は居ないのが現実ではないか。

以前、警察官を殺害すると言う事件が起き、蘭はその事件に巻き込まれ一時記憶をなくすということがあった。

その記憶をなくしていたときに心に引つかかっていた彼の名前。

記憶を取り戻しでも、彼に会うことは無かった。

その時はいつもの事だと、気にはしてはなかった。

だけど今はこう思ってしまう。

『会えない』のではなく

『会うことが出来ない』のではないかと

あのトロピカルランドで分かれてから時々出会っていた新一は自分の想像が作り上げた虚像ではないのかと。居ないから会えないのだと。

だからここに来たのだ。

自分の記憶通りの風景がここにあった。

少し安心できた。

虚像ではなく、現実だったことに蘭は少し安堵した。

そして同時に会えないことへの不安が大きくなってきた。

パキッ

小枝を踏みしめる音に、蘭は驚き音のほうを向いた。
今は真夜中の1時、あれから1時間もこの場に居たことになる。

暗闇の向こうから、小さな光が揺れているのが見えた。

正直、空手が強い蘭でもお化けや幽霊類は大の苦手だ。

だんだんと光が大きくなり、よおやく光の持ち主の輪郭がはっきりしたとき、別の意味で蘭驚いた。

「コナン君！」

そう、腕時計型麻醉銃のライトを頼りに、ここまで蘭を迎えに来たのだ。
でも、

「どうしてここに？」

そう、ここは工藤家の別荘なのだ。

もちろんコナンに話しては居ないし、平次や和葉にも言ってない。
ここを知っている人間は、いまこの別荘地には居ないはずだ。

「いくらなんでも、こんな時間に出歩いてたら風引いちゃうよ。」
そう言っつて、蘭にジャケットを手渡す。

「あ、ありがとう。ってそうじゃなくって！どうしてこの場所知ってるの？」

「ここ、僕も来た事あるんだ。新一兄ちゃんにつれてきてもらったことがあるんだ。」

「新一に？」

「うん！でも蘭姉ちゃん、どうしてここに？」

「新一をね、確かめに着たんだ。」

「新一兄ちゃんを？確かめるって？」

「ねー、コナン君。新一をどう思う？」

ベンチの隣に招待され、見上げる形になったコナンに、質問で返す。

「どうって・・・」

「私はね、コナン君。新一は夢なんじゃないかって、そう、思ってたの。」

「夢？」

「うん。だって会えても直ぐ居なくなっちゃうじゃない。本当に会いたい時に会えないし。」

離している間でも、桜からは目を離さない蘭。

そんな蘭を見上げて、コナンも桜を見る。

やっぱり、蘭は自分の事でこんなにも悩んでいたのか。

たった些細なことでも一喜一憂するこの少女に、今の自分では何も出来ないことを知らされたコナン。

今の彼女を満足させるだけのことを自分ではできるのだろうか。

桜から視線を下ろし、俯くコナン。

何も出来ない自分をただ不甲斐なく思う。

でも、仮初だとしても、まだ本当の自分ではなくても、言わなければならぬ。

「新一兄ちゃんは、ちゃんというよ。」

「コナン、君？」

切ない表情で蘭をみる。

その表情に、蘭は名前を呼ぶことしか出来なかった。

「新一兄ちゃんは、ずっと蘭姉ちゃんの側にいるよ。ただ、目に見えないだけで。」

「え？」

「きつといつも蘭姉ちゃんのこと考えてて、心配して。会えない分とても想ってるはずだよ。」

「・・・」

「だからその思いはきつと蘭姉ちゃんの側で見守ってるはずだよ。」

「想ってるだけじゃ・・・不安なのよ。」

「え・・・」

少しの沈黙の後、ポツリと呟いた蘭の声は小さくかろうじてコナンも聞き取れたくらいに小さかった。

「想ってくれなくてもいい！私のことを嫌いでもいい！ただ！・・・

・ただ、側で感じていたいの。新一をこの目で見える位置で。」

「蘭・・・姉ちゃん」

「ごめんね、コナン君にこんなこと言っても困らせちゃうだけって分かってるのに。」

「ううん・・・」

「ええやん、滅多にグチ言わへん姉ちゃんや、たまには言いたいこ

と言ったかて誰も迷惑やなんて言わへん。」

居るはずのない人間の声が聞こえ、蘭はびっくりして硬直し、コナンは蘭を守るように後ろ手に守る体制をとる。

視線の先には、

「はっ・・・平次兄ちゃん!？」

思わず服部といいそうになったのをなんとか堪え、ただびっくりして目を白黒させるだけだった。

「服部君! どうしてここに?」

「なんや、よー寝れんくてな。元々起きとってん。んで、姉ちゃんが出つてた後、この坊主が追いかけるように出たんで、ほっといたんやけど。」

ちらりとコナンを見やる。

「ええ加減、時間も時間やし。迎えにきたったんや。」

「そつかー、ごめんね。服部君にまで迷惑かけちゃったね。」

「それがあかんのや。」

「え?」

「言いたいこと、言わへんでどないすんねや。このまま言いたいこと言わずに、溜め込んで、それでいつか解決すんのか?」

「平次兄ちゃん!!!」

あからさまに蘭に対する挑発に、コナンも声を荒げる。

そんなコナンを無視し、更に言葉を続ける。

「姉ちゃんは人のことを一番に考える。それは勿論工工事や。相手の事を思いやる心無くしてしもーたら、人のことどーとも思わん最低の人間になつてまう。」

「せやけどそのせいで辛いゆーて工藤の事、無かったことにしようとしてる姉ちゃんを俺は許さへんで!」

「!」

「あれだけ工藤に守られて、助けられて。その工藤の思い、気付い

てへんなんて言わせへんで！確かに工藤は事件やー言うて電話も厳かにしてたかも知れへん。今までみたいに出会うことすら出来へんようになった。」

「工藤はやっかいな事件に巻き込まれてる。これは知つとるな？」
コクンと小さく頷く蘭。両手は膝の上で握られ、少し震えていた。
コナンはそんな蘭を心配しつつ、服部がこの先なにを言うのか、見当も付かない。

ただ、今ここで服部を止めればきつと工藤新一が出てきてしまう。
今は何も言わず成り行きを見ていくしかない。

「工藤が巻き込まれている事件。何か言われへん、せやけどどんな奴らかなら俺が言わへんでも大体なら姉ちゃんでも分かるやろ？」

「命の・・・危険がある相手・・・」

「せや、せやから工藤は姉ちゃんに何も言わへんや。姉ちゃんを巻き込みたくない工藤の気持ち、分かるはずやろ？」

「でも！誰かを守りながらなんて器用なことやりながら対抗できる相手やったら、とっくに工藤は姉ちゃんに何もかも話とるはずや！」

「こっちが隙を見せればおしまいや。そういう相手なんや。」

小さなため息が聞こえた。

自分のなのか、服部なのか、蘭なのか。

ただ、何かを区切るように出たため息は3人の気持ちを整理するためには必要だったのだろう。

「私は、どうしたらいいの・・・何を、信じたらいいの」
「蘭姉ちゃん・・・」

ここまで追い詰めてしまったのは自分なのに。

どんな理由があり、例え危険なことに巻き込んでしまう可能性がある

つたにせよ、たった一人の大切な女性をここまで追い詰めたのは、
紛れも無い自分だ。

「……忘れても、いいよ……」

(工藤……)

「コナン君？」

「新一兄ちゃんのこと、辛いなら忘れてもいいんじゃない？ 新一兄
ちゃんだって、自分のせいで傷ついてる蘭姉ちゃん見てられないよ。
無理しなくていいんだよ？ 蘭ねえちゃん。自分が楽になる方法、と
ってもいいんだよ。」

「コナン君……」

「そんなん！ せやったら工藤の気持ちどないなんねん！ 姉ちゃん守
るために今まで工藤やって苦しんできたんやで?!」

「それは!……」

「ありがとう、2人とも。」

「「え」」

「服部君は私のことを思って、溜めたこと言えるように、挑発して
くれたんでしょ？ コナン君は私のことを想って忘れていいなんて言
ってくれた。」

「……辛い、新一が実在するのは当然だから。居るのに会えな
いなんて……辛すぎる。我儘だって分かっている！ でも言えばきつ
と新一は困るから、だから言えなかった……本当はずっと側に居
たいの。」

「それでええんやないか？」

「え？」

「言いたいことゆーて、工藤困らせたかてええやないか。それより
も姉ちゃんに忘れられるほうが、めっちゃ辛いで？」

「うん、そうだよな。どうして私、新一が夢だなんて思ったんだろ。」

「それだけ姉ちゃんが我慢しとったゆーことや。ま、姉ちゃんが愚痴った後には俺に工藤から愚痴が来るやろっからな。」

ニヤツつとコナンに視線を送ると、その視線を受けたコナンは苦虫を噛み潰したような表情をしていた。

その表情に平次は更にニヤつく。

「そんな、それじゃ服部君に迷惑かけちゃうわ。やっぱり新一には無理をいわないほうがいいんじゃない。」

「そんなことあらへん。俺は工藤の《親友》やさかい。親友に相談されるのは嬉しいしな。」

「そんなことで一々愚痴なんて言わないよ、新一兄ちゃんは「なんやとー！」

「うふふ、そうね新一は人に愚痴こぼすような人じゃないわね。」
「姉ちゃんまで・・・まーええわ、姉ちゃん、元気でしたようやしな。」

「ありがとう。」

ふわりと笑う蘭。

やっといつもの蘭の笑顔を見れた。それだけでコナンは満足だった。たとえ忘れられても、嫌われても、蘭が心から笑顔を出せるなら、それだけでよかった。

理解を得られたのは、唯一のライバルであり理解者でもある服部のおかけだろう。

（サンキューな、服部）

後でもう一度感謝の意を表そう。

「ほんなら、そろそろ戻るか？和葉もまってんで。」

「え！？和葉ちゃんも起きてるの？」

「せや、あいつもあいつなりに姉ちゃんのこと心配してんねん。あー、迷惑掛けたなんて思わへんでええで。」

「本当に、心配かけちゃったんだね。」

「あいつには姉ちゃんの笑顔みせたってーな。それで十分やで。」

「うん！」

「よっしゃ、ほんなら戻るか。あいつがあつたかい飲みもん作って待ってるよって。」

そう言って歩き出した平次。

蘭とコナンも後を追うように歩き出した。

「コナン君もありがとう。」

「蘭姉ちゃん。」

優しい笑顔で笑う蘭にコナンも笑顔で返す。

失いたくない大切な彼女。例え彼女から自分が消えてしまってもま
り続けたい存在。

きつと、全て取り戻し君の前に戻るから。

そうしたら、二度と君の手を離さないから。

小さいころあの桜の木の下で交わした約束を果たせるように。

舞い落ちる花びら一つ一つに誓ってもいい。
何が起ころうと、全てを捨てても、君を守るから。

《ずっと、一緒に》

夢でも現でも（後書き）

いやー、最後入れるだけ詰め込んで強制終了感丸出しですが（笑）
これにて完結でございます。

長い間お付き合いいただきありがとうございます！

ご意見ご感想お待ちしております！v

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8467s/>

桜の雨

2011年11月27日00時49分発行